

序『カラム』の時代—— マレー・イスラム世界の「近代」、1950～1969年

山本 博之

京都大学地域研究統合情報センター

この論集は、1950年から1969年までシンガポールで発行されたマレー語月刊誌『カラム』(Qalam) について、掲載記事をテーマごとに紹介する研究ノートをもとめたものである。以下では、まず『カラム』について簡単に整理した上で、この論集のもととなった『カラム』プロジェクトおよび本論集の各章の内容を紹介する。

1. 『カラム』について¹

『カラム』は、ジャウィ(アラビア文字を改変したマレー・インドネシア語の表記法)を一貫して用いたマレー語雑誌である。

『カラム』は、1950年7月にシンガポールで創刊され、創刊時からの編集・発行者であるアフマド・ルトフィ(エドルス)が1969年10月に亡くなるまで刊行が続いた。創刊して1、2年で停刊になるマレー語雑誌が多い状況で、20年にわたって刊行が続いた珍しく長命の雑誌である。

『カラム』の記事は、創刊号から停刊号まで、全てジャウィ表記のマレー語で書かれていた。マレー・インドネシア語はかつてジャウィで書かれていたが、旧オランダ領(現インドネシア)地域では20世紀に入るとローマ字での表記が一般的となり、また、旧イギリス領(マラヤやシンガポール)でも1960年代までには多くのマレー語刊行物が表記をジャウィからローマ字に切り替えていった。そのような状況にあって、『カラム』は1969年の停刊まで一貫してジャウィで発行を続けた点で珍しい雑誌である。マレー語教育の普及とマレー語メディアのローマ字への切り替えに伴い、マラヤやシンガポールでローマ字表記のマレー語メディアが非ムスリムにも読者層を拡大していったのと対照的に、『カラム』は読者層を事実上イスラム教徒に限定していた。

また、『カラム』は、多彩なコラム記事とその執筆者

によっても特徴づけられる。

『カラム』はシンガポールで発行され、主要な読者はシンガポールとマラヤのムスリムであったが、記事の執筆者にはマラヤやシンガポールだけでなくインドネシアの著名なムスリム知識人も迎え、インドネシアや他の東南アジア諸国のムスリム社会の情勢に関する記事も多く掲載していた。また、エジプトで学ぶ留学生からの寄稿などを通じて、中東のイスラム思想を積極的に誌面で紹介していた。さらに、アフマド・ルトフィが中心になって1956年にシンガポールでムスリム同胞団が結成され、『カラム』編集部が同団体の事務局となると、『カラム』は同団体の事実上の機関誌となった[山本2003]。

記事によっては、他の刊行物に掲載された記事がそのまま転載されており、原著者に『カラム』に投稿する意思があったかどうか疑わしいものもあるが、そのような記事を含めて、当時マレー語刊行物を通じて戦わされていた議論を見ることができる。記事の冒頭に『カラム』編集者による数行のコメントがあり、この部分から『カラム』編集者のこれらの記事に対する考えをうかがうこともできる。

このような特徴を持つ『カラム』が刊行されていた1950年代から60年代にかけての時期は、マラヤ(マレーシア)とインドネシアのそれぞれにおいて、独立により国家制度を整備したものの、欧米型の議会制民主主義をそのまま適用することの限界が認識された時期であったと見ることができる。ただし、この時期はその後に訪れる「開発の時代」の準備段階として位置づけられ、この時期に何らかの積極的な意味を与えて分析の対象にすることはあまり行われていない。そのためもあり、この時期の政治や社会におけるイスラム主義勢力の活動はほぼ「不在」として扱われてきた。しかし、『カラム』の誌面からうかがえるように、マラヤ(マレーシア)とインドネシアがそれぞれ別の独立国家になってもなお、互いの政治情勢の展開を観察し、スマトラとマラヤによる連合国家や、マ

¹ 『カラム』についての詳細な情報は[山本2002b]を参照されたい。

レー・イスラム世界における統一したイスラム国家の建設を構想する動きも存在していた。したがって、この時期のイスラム主義勢力は決して「不在」だったわけではない。

このように考えれば、『カラム』は当時の国境を超えたイスラム主義の思想や運動をうかがうことができる貴重な資料であることがわかるだろう。それにもかかわらず、『カラム』はこれまで研究上の利用がほとんどなされてこなかった。その理由は、『カラム』がジャウィで書かれているために利用しにくかったことに加え、いくつかの図書館に分散して所蔵されており、体系的に利用するのが困難であったことなどが考えられる。

以上の認識のもと、本論集のもととなる『カラム』プロジェクトは、各地に分散して所蔵されている『カラム』を収集して1つの資料とした上で、記事見出しおよび記事本文をローマ字に翻字し、一般に公開することで研究者の便に供することを目的としている。

2. 『カラム』プロジェクト

『カラム』記事のローマ字翻字プロジェクトに関連して、これまでに『カラム』のデータベース作成プロジェクトがどのように進められ、これからどのような方向を目指しているかをまとめておく。

『カラム』雑誌記事データベース

筆者は、イギリス領北ボルネオ（現マレーシア・サバ州）におけるムスリムの政治運動を調べる過程で、1950年代のシンガポールのムスリム同胞団の活動が『カラム』を通じて北ボルネオに紹介され、同団体の北ボルネオ支部が設立されたことを知った。シンガポール国立大学の図書館には『カラム』のマイクロフィルム2巻が所蔵されていたが、そこに収められていたのは全228号のうち80号分でしかなかった。限定的ではあるものの同資料を収集し、ジャウィ文書研究会（後述）で何度か報告した後、マイクロフィルム2巻分の全ての記事見出しをローマ字に翻字した記事見出し一覧を作成した[山本2002b]。

その後、マレーシアの図書館におけるジャウィ表記マレー語の定期刊行物の所蔵リスト[山本2002a]を作成した際に、マラヤ大学のザアバ記念図書室に『カラム』が所蔵されており、シンガポール国立大学のマイクロフィルムに収められていない巻号も多数

あることが確認された。これとあわせて、マレーシア・シンガポール内外の図書館で部分的に所蔵されていた巻号を収集し、全体で212号分を備えた極めて欠号率の低いコレクションとすることができた。

さらに、筆者が2006年から所属する京都大学地域研究統合情報センター（京大地域研）が進めている雑誌記事データベース・プロジェクトの一部として、収集した『カラム』の誌面をデジタル化し、それぞれの誌面に記事見出しのローマ字翻字を関連付けすることで、記事見出しをローマ字で検索して当該誌面を呼び出すことができる『カラム』雑誌記事データベースを作成し、京大地域研のデータベースの1つとして2008年5月に一般公開した(<http://www.cias.kyoto-u.ac.jp/index.php/database00>)。

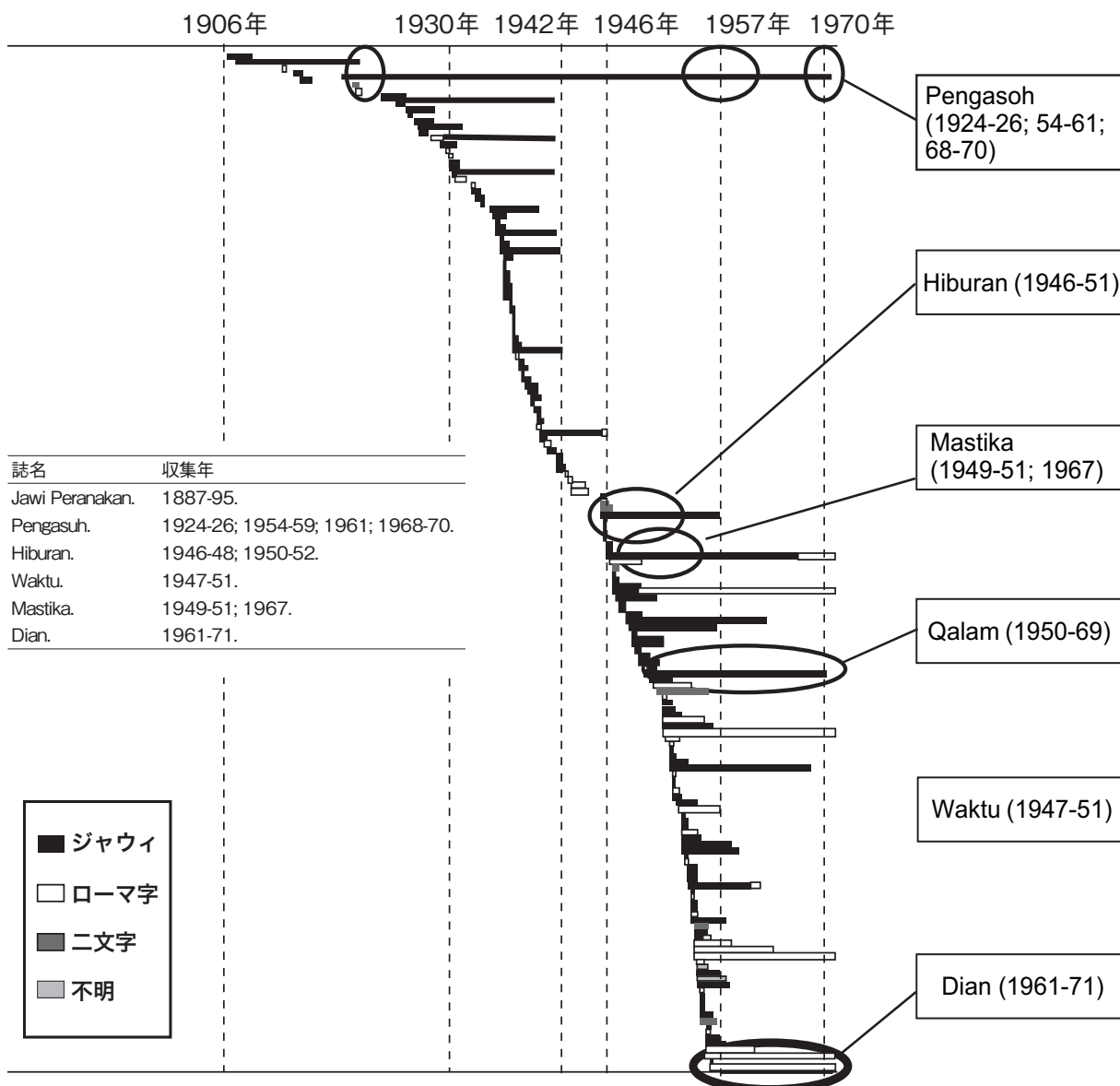
マレー・インドネシア語文献総合データベース

『カラム』雑誌記事データベースは、それ自体で貴重な資料であるが、他の雑誌記事データベースと接合することにより、以下の2つの方向での発展が見込まれている。

1つは、資料の所蔵場所によらないマレー・インドネシア語文献の統合データベースの構築である。マレー・インドネシア語は、地域や時代によってローマ字の表記法が異なっている。例えばインドネシアで発行されていた『ワクトゥ』という雑誌は、初期のタイトルは waktoe であり、後に waktu に変更された。この単語はマラヤやシンガポールでは waktu と綴られた。したがって、waktoe と waktu を同じ単語と判断する検索システムを構築しなければ、地域や時代を超えた雑誌記事の横断検索はできないことになる。

地域や時代を超えた横断検索は、マレー・インドネシア語雑誌にとって極めて重要である。マレー・インドネシア語の雑誌のほとんどは、創刊されて2、3年で停刊となり、編集者や執筆者は別の雑誌に受け継がれることが繰り返されてきた。また、雑誌の枠を超えて引用や論争がしばしば行われていた。そのため、1つの雑誌の記事だけ追っていても、当時の社会における議論の全体像は掴みにくい。複数の雑誌が集まって全体で1つの言論空間が成り立っていたため、その議論を追うには複数の雑誌を横断して記事を読まなければならない、そのためには横断検索が不可欠となる。

このような考えのもと、京大地域研の雑誌記事データベース・プロジェクトでは、マレー語定期刊行



京大地域研で雑誌データベース化を予定しているマレー語雑誌

物のうち刊行が長く続いたものを中心に収集し、誌面のデジタル化および記事見出しによる検索可能なデータベースの作成を進めている。

横断検索システムを備えた雑誌記事データベースが実現すれば、機関や個人が所蔵する雑誌資料をデジタル化してインターネット上で公開したものを接合することにより、複数の場所で所蔵・公開されている雑誌資料を仮想的に1つのデータベースとして利用することが可能になる。

もう1つは、オーストラリア国立大学が実施しているマレー語文献コンコーダンス・プロジェクト(MCプロジェクト、<http://mcpanueduau/Q/mcp.html>)との連携である。MCプロジェクトは、主に20世紀以前の王統記や口承を中心に、本文テキストをローマ字

にしたものをもとにコンコーダンスを作成し、データを順次公開している。また、シンガポール国立大学では1930年代のマレー語日刊紙のローマ字翻字を行っており、この結果をMCプロジェクトと接合することが計画されている。MCプロジェクトはコンコーダンスであり、それぞれの刊行物の誌面を画像で見ることができない点で京大地域研の雑誌記事データベースと異なっているが、京大地域研の雑誌記事データベースの記事本文をローマ字翻字したものはMCプロジェクトと接合可能である。1950年代および60年代を主に扱う京大地域研の雑誌記事データベースと接合することにより、より広い範囲のマレー・インドネシア語文献を対象とした統合データベースを構築することができる。

「ジャウィ文献と社会」研究会

『カラム』雑誌記事データベースは、記事見出しのローマ字翻字を行い、これにより記事見出しの検索が可能になっているが、さらに記事本文のローマ字翻字を行うことによって記事本文も検索の対象になり、MCプロジェクトとの接合も可能になる。そのため、「ジャウィ文献と社会」研究会により、『カラム』の記事本文のローマ字翻字作業が2008年に開始された。

「ジャウィ文献と社会」研究会は、2009年に解散したジャウィ文書研究会の研究を継承し発展させる研究会の1つである。2001年に発足したジャウィ文書研究会²は、日本における東南アジアのムスリム社会の研究において従来あまり利用されてこなかったジャウィ文献の利用法を模索する研究会であり、ジャウィを用いた研究の基盤整備の面で大きな成果を上げた³。ジャウィへの関心を持つ多様な背景をもつ人びとが集まったことから、研究会の発足当初から参加者の関心は互いに大きく異なっており、このことは研究基盤整備から実際の研究に段階が移る過程で明確になっていった。2006年度までに、東京外国語大学、上智大学、京都大学でジャウィに関係する具体的な研究プロジェクトがそれぞれ組織され⁴、ジャウィ文書研究会は、事実上これらの3つの研究プロジェクトの連絡役としての役割が中心となった。このことを受け、ジャウィ文書研究会は2009年5月末をもって解散し、その研究活動はそれぞれの研究組織・プロジェクトに継承されることとなった。それらのうち京大地域研の筆者の研究室に事務局を置く「ジャウィ文献と社会」研究会は、主にマレー・インドネシア語のジャウィ文献を利用して、ジャウィ文献に関わる社会を対象とする研究会である。

「ジャウィ文献と社会」研究会は、2009年度の研究活動の一部を京大地域研の萌芽研究「マレー語雑誌『カラム』データベースを利用した研究」(2009年度、研究

代表者：山本博之)と合同で行った。2009年6月21、22日に実施したジャウィ講読講習会では、地域研究コンソーシアムを通じて一般公募した参加者に対してジャウィ講読の講習会を行うとともに、以下の研究発表が行われた。

- 西尾寛治「人としてのジャウィ」
- 菅原由美「ペゴン史料の利用法と課題」
- 國谷徹・山田直子「オランダ植民地行政とジャウィ文書」
- 坪井祐司「イギリス領マラヤの行政文書におけるジャウィ史料」
- 山本博之「『カラム』とマレーシア地域におけるジャウィ表記の変遷」

この講習会では[山本2002c]を教材とし、『カラム』などのジャウィ文献を用いて講習を行った。受講者のうち2名が本論集に参加している⁵。

なお、2010年度には京大地域研の共同研究「脱植民地化期の東南アジアにおけるムスリム社会の動態」(2010-2011年度、研究代表者：坪井祐司)と合同で研究を行う予定である。

3. 本論集の構成

この論集は、『カラム』の記事本文のローマ字翻字の作業を通じて得られた考察をまとめたものである。各論考はいずれも限定された資料をもとにした予備的な考察であり、それぞれの論考が扱う事例を当時のマレー・イスラム世界にどのように位置づけるかなどについては、今後プロジェクトを進めていく過程で検討を重ねていきたい。

翻字プロジェクト参加者は、それぞれの関心に応じて記事を選び、ローマ字翻字を行っている。それぞれの関心に応じて記事を選んだために対象となる時期は統一されていないが、おおよそ時期の順に次のように配列されている。

(1) マラヤの脱植民地化に向けた ムスリム社会の課題(坪井祐司)

坪井によれば、1950年から1960年までに24回掲載された「祖国情勢」コラムは、脱植民地化と国家建設に伴うマラヤのムスリム社会の課題の変化に対応して、1950年末から1951年前半(独立運動の枠組みとし

5 また、同講習会では東京大学大学院総合文化研究科博士課程の三王昌代氏の提供により、台北の国立故宫博物院図書文献館に所蔵されているジャウィ文献の読解も行った。その結果の一部を用いた研究成果に[三王2009]がある。

2 2001年4月の設立時の事務局は上智大学の川島緑研究室に置かれた。2003年に東京外国語大学の青山亨研究室に事務局が移り、その後2009年5月の研究会解散時まで同研究室に置かれた。

3 その成果は『上智アジア学』第20号などにまとめられている。

4 東京外国語大学「中東イスラム研究教育プロジェクト」共同研究プログラム「マレー世界における地方文化」(2005-2009年度、主査：新井和広)、上智大学アジア文化研究所イスラム地域研究拠点・第2グループ「東南アジア・イスラムの展開」(2006-2010年度、代表者：川島緑)、京都大学地域研究統合情報センター共同研究「イスラム教圏東南アジアにおける社会秩序の構築と変容」(2006-2007年度、代表者：山本博之) および同センター共同研究「イスラム教圏東南アジアにおける民族・宗教と社会の複層化」(2008-2009年度、代表者：山本博之)。

てのムラユ性を強調)、1952年末から1953年(民族のすみ分けを前提とした独立の枠組みが定まる)、1955年から1957年(独立が現実のものとなりムラユ人性を回顧)、1959年後半から1960年前半まで(ムラユ人が抱える経済格差の是正を要求)の4つの時期に分けて捉えることができる。

(2)シンガポールのウラマーによる クルアーン解説(國谷徹)

國谷は、シンガポールで活躍したウラマーであるアブドゥッラー・バスメーの連載記事「クルアーンの秘密」を分析した。アブドゥッラー・バスメーは、『カラム』発行者のアフマド・ルトフィとともにシンガポールのムスリム同胞団設立に際して重要な役割を担った人物であるが、これまであまり研究がなかった。國谷は、アブドゥッラー・バスメーがエジプトのムスリム同胞団の強い影響を受けた改革主義的思想の持ち主であったことを明らかにした。この連載記事は、20世紀初頭にエジプトで活躍し、雑誌『ムスリム同胞団』の編集にも携わったことがあるウラマーのタンターウィー・ジャウハリによるクルアーン解釈を紹介する形が取られている。國谷は、アブドゥッラー・バスメーがタンターウィーの近代主義的クルアーン解釈を下敷きにしてイスラム教の自己革新およびイスラム教と近代文明の調和をマレー・イスラム世界に伝えようとしたと論じている。

(3)1955年のインドネシア総選挙と イスラム国家建設(山本博之)

山本は、シンガポール、マラヤ、インドネシアの3国において、独立後(あるいは独立直前)の初の総選挙が行われた1955年に注目する。マラヤとインドネシアでは、選挙を通じたイスラム国家の実現を夢見たイスラム主義政党は、選挙によって国民主義政党が政権に就くと中央政界で非主流派となり、イスラム国家建設が実現しなかったという同様の経緯をたどった。しかし、インドネシアではイスラム主義勢力が中央政府に対する「反乱」に打って出たのに対し、マラヤではイスラム主義勢力は議会制民主主義の枠内における野党に留まった。スマトラ(アチェ)における情報源の影響を受けたためか、『カラム』誌は、インドネシアの総選挙とその後の政治過程を観察する過程で、スカルノ大統領に対する評価を「独裁者」、「ムスリムの敵」と変化させ、投票によるイスラム国家建設から

戦いによるイスラム国家建設へと主張を変化させた。山本は、この認識がシンガポールにおけるムスリム同胞団結成の背景の1つであると見ている。

(4)マラヤにおける近代的公教育の導入に対する 二重の危機感(金子奈央)

金子が紹介するのはマラヤのマレー人ムスリムによる教育に関する議論である。独立後のマラヤでは、1950年代から1960年代にかけて西洋近代に基づく公教育が制度化され、また、教授言語のマレー語への一本化が進められた。このことは、マレー人ムスリムのあいだで行われていた伝統的なイスラム教育が非主流化されること、そしてマレー語教育への切り替えに伴って非マレー人への教育に国費が費やされることという二重の危機感をマレー人ムスリムに与えることになった。このような状況で、イスラム教育の導入によってモラルの維持をはかるべきとする議論がなされる一方で、西洋近代の教育論からルソーなどを引き、また、ヒンドゥー教や仏教の世界観と対比しながら、子どもに対する教育の重要性を説く論考も見られた。

(5)1960年シンガポール・ムスリム法施行法案 (光成歩)

光成は、現在のシンガポールにおけるムスリム法施行法の制定(1966年)に先立ってシンガポール議会に提出され廃案になった1960年ムスリム法施行法案を取り上げ、この法案の審議をめぐる議論を紹介している。法案の内容を検討するために政治が公開したマレー語訳を検討する期間が短かったことや、マレー語訳は正文でないために内容に責任を負わないとした政府の態度が批判された。光成は、法案への反対の背景には、法制化することで国家の公的な制度として認知されることへの欲求はあるが、それによって国家による介入を招き、ムスリム法に対する自主管理を失うことへの恐れがあり、このような両義的な感情が法案への消極性を生み出したと考察している。

4.『カラム』の時代

すでに述べたように、テーマや時代の選択は統一されていないため、この論集の論考だけをもって『『カラム』の時代』を論じるには材料が不十分である。しかし、本論集の各論考を通じて、独立により国家の運営を自分たちの手で行うことになったマレー・イス

ラム世界のムスリム知識人たちが、国家機構のイスラム化において挫折を経験し、他方で西洋近代化による危機感を感じ、それに対抗するために宗教教育の強化とともに科学技術の取り込みによるムスリム社会の「近代化」をはかろうとしていた様子が浮かび上がってくるだろう。

『カラム』が刊行された1950年代は、独立が現実のものとなった人びとが国家制度を構築していった時期だった。しかし、この時期の国家指導者は1960年代後半の流血事件を契機に退場を余儀なくされ、かわって開発独裁体制と呼ばれる統治が始まることになる。『カラム』は、ちょうどこれと入れ替わりになる形でマレー・インドネシア語の言論空間から退場することになった。『カラム』が刊行されていた時代は、議会制民主主義の導入と挫折の時期として扱われ、この時期のムスリム社会の動向はあまり研究されてこなかった。現在のマレーシアやインドネシアにおける政治言説の表舞台には表れない言説空間を担保していたという意味で、本論集が扱う時期を「『カラム』の時代」と呼んでいる。『「カラム」の時代』という題には、カラム(筆)を手にとって言論によって社会の変革を試みることの有効性が強く信じられていた時代という意味も込められている。

「イスラーム」と「イスラム教」

最後に、この論集における表記について簡単に述べておきたい。現在、学術論文では「イスラム教」ではなく「イスラーム」と表記するのが一般的である。これには、①アラビア語の長母音を正しく表記すること、②イスラームにおいては宗教とそれ以外の実践が区別されていないために「〇〇教」とするのは適切でないことという理由が挙げられている。この論集のもととなった共同研究プロジェクトでは、この考え方を尊重した上で、上記の2点について東南アジア地域に即して検討した結果、①マレー・インドネシア語には長母音がなく、現地語の「Islam」は「イスラム」と表記するのが妥当であること⁶、②マレーシアやインドネシアではイスラム教を仏教やキリスト教などとともに「宗教」(agama)の1つとして位置づけ、そのことによって多民族・多宗教の混成社会を統合する努力が積み重ねられてきていることから、現地社会のそのような試みを尊重するという意味で、「イスラーム」ではなく「イスラム教」の表記を採用することにした。

この表記には、中東・アラブ世界から各地に伝わったイスラームが、一方でその普遍性が意識され続けながらも、他方で各地域の事情に即して受け入れられ、地域社会において位置づけられてきたという理解のもと、その両方の側面に目を向けることを象徴的に表明するという意味も込められている。その上で、「東南アジアではイスラームではなくイスラム教とすべき」というように統一を強いる態度は地域研究になじまないとの考え方のもと、それぞれの立場や考え方に応じた表記を用いている。この論集の中では執筆者によって表記の統一がなされていないものがあり、その点では読者に不便を強いることとなるが、以上のような考え方に基づいていることをご理解いただければ幸いである。

参考文献

- 小林寧子 2008『インドネシア——展開するイスラーム』(南山大学学術叢書)、南山大学。
- 三王昌代 2009「清代中国におけるスルルー(蘇祿)と中国のあいだの文書往来: ジャウイ文書と漢文資料から」『東洋学報』東洋文庫、91(1): 01-027。
- 山本博之 2002a「マレーシアの図書館におけるジャウイ雑誌の所蔵状況」『ジャウイ文書研究会ニューズレター』、7: 3-13。
- 2002b「資料紹介『カラム』」『上智アジア学』、20: 259-343。
- 2002c「ジャウイ綴りマレー語の書き方と読み方: 20世紀のマレーシア地域を中心に」『上智アジア学』、20: 359-382。
- 2003「東南アジアにおけるムスリム同胞団の成立とその初期の活動について」『ODYSSEUS』(東京大学大学院総合文化研究科)、7: 59-73。
- 2008「橋としてのジャウイ、壁としてのジャウイ: 東南アジア・ムスリムの社会と言語」佐藤次高・岡田恵美子編著『イスラーム世界のことばと文化』成文堂、pp.201-220。

6 この点については [小林2008]でも触れられている。